九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本資本主義確立期における上海石炭市場の展開

山下，直登
東京教育大学大学院

https://doi.org/10.15017/13655

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 9, pp.21-46, 1977-12-04. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

日本資本主義確立期における上海石炭市場の展開

山下直登

はじめに
一、上海市場の位置
二、上海石炭市場の展開
1. 輸入高の推移とその特徴
2. 競争炭の動向
3. 日本炭の動向
4. 石炭相場の動向
5. 石炭売込先
6. 石炭取扱商について
展望 ― まとめにかえて

はじめに

日本資本主義における石炭産業の持つ位置を明らかにすることはそれ自体が日本資本主義の構造的特質解明の重要な一環をなすものであるが、一方、問題を財閥資本研究に絞ってみた場合でも、石炭産業と財閥資本との関係を明らかにすることは財閥資本形成史分析にとって欠くことのできない重要な課題である。いな、この両者の関係のなかにこそ実は財閥資本の資本蓄積基盤形成の特質がもっとも鮮明にあらわれていると筆者は考えている。

すなわち、石炭産業の生産、金融、流通をめぐる財閥資本のかかわり方のなかに、「日本型金融資本」としての財閥資本の資本の運動形態の特質を看取することができるのである。その場合、問題の焦点は石炭産業をめぐる財閥資本の三部門間（生産・金融・流通）の有機的結合の実証的分析におかれなくてはならないが、就中、財閥資本形成期＝日本資本主義確立期における石炭産業の輸出産業として果した役割を考えるとき、われわれは流通過程における財閥資本と石炭産業との関係をより重視しなければならない。

換言すれば、当該時期の石炭産業の構造的特質は輸出石炭市場における国際的諸条件により強く規定されるかたちで形成されたということであり、同時に、それは財閥資本の形成それ自体がかかる国際的契機＝諸条件と密接に関わってなされたということでもある。*(1) 明治三三年の北清事変を契機に資本主義世界は帝国主義段階に突入したことの意味をこの場合重視しなくてはならない。

本稿の課題はかかる問題へのアプローチの前提として、明治三〇～四〇年代における日本炭の三大輸出市場の一つであった上海石炭市場の動向とその特徴を実証的に明らかにするところにある。なぜならば、それが究明されることによってはじめて日本帝国主義の尖兵としての財閥資本の東アジア市場進出の実態の分析が具体性をもって可能となるからであり、それはまた研究史的空白を埋める意味においても不可

欠な課題と考えられるからである。そして、この場合、分析は三井物産の展開を射程にいれつつおこなわれる。*(2)

以下、上海市場の位置づけから明らかにしていこう。

*(1) 筆者はこのような観点から一九七七年の第四六回社会経済史学会共通論題報告をおこなったが、そこではこのような筆者の基本的見解を概括的に提示しておいた。この点、拙稿「日本資本主義確立期における東アジア石炭市場と三井物産―上海市場を中心に―」(『第四六回社会経済史学会大会報告資料』および『エネルギー史研究ノート』8所収)をも参照されたい。

*(2) 物産の展開を含めた右の論点をさらに深めるために別稿を用意している。

一、上海市場の位置

明治四〇年九月、外務省通商局が刊行した『清国事情』第一輯は貿易港としての上海についてつぎのようにのべている。(1)

上海ノ所在地タル江蘇省及浙江省沿岸、竝ニ長江一帯各省ハ支那本部ニ於テ最モ殷富沃饒ノ上区ニシテ、農工商ノ事業発達シ物産ノ饒多ナル、財力ノ充溢セル、運輸ノ利便ヲ擅ニスル、実ニ支那ノ富庫、財源ノ称ニ負カス、生産力、購買力共ニ綽々トシテ余裕アリト云フヘシ(中略)、殊ニ揚子江ノ宏流通貫奔注シ、支那本部ノ腹心ヲ経過スルハ其状、猶一大血管ノ人身栄養ノ源トナリ、生機ノ淵タルカ如シ、上海ハ此等地方ノ咽喉ヲ扼シ、輸出入貨物ノ集散繁劇ヲ極メ、極南支那ヲ除ク外、支那全国ノ貿易ハ殆ント此港ニ依ラサルハナシ、故ニ該港貿易ノ消長ハ直ニ支那貿易全体ノ隆替ヲ表示スルモノニテ、該港ノ支那貿易上最枢要地位ヲ占有スルハ疑フ可ラサル所ナリ、今ヤ其基礎確定シテ、復動揺スヘカラサルモノアリテ該港ノ将来益々発達ヲ加フルハ推知スルニ余アリトス。

すなわち、当該時期の中国の外国貿易は「北ニアリテハ上海ニ集中シ、南ニアリテハ香港ニ集中シ、他ノ諸港ハ漸次衰微ニ赴キ、上海ト香港ハ南北ニ並立シテ外国貿易ヲ司リ、他ノ諸港ハ垂拱シテ成ヲ仰グモノノ如シ」(2)といわれているように、上海港は諸国唯一の国際貿易市場として、「独リ長江各港ノ鎖鑰タルノミナラス、殆ント支那全国貿易ノ総滙ニシテ支那沿海福州以北、中清長江一帯及北清各港ハ皆該港ヲ経テ物貨ヲ輸出入スルヲ恒ト」しており、香港とともに「支那貿易ヲ専擅壟断」する位置にあったのである。(3) また、上海は「東洋第一ノ貿易港ニシテ船舶ノ出入多ク、製造工業ノ盛大ナル支那第一ニシテ紡績製糸ノ工場夥シキニヨリ石炭ノ需要莫大ニシテ、石炭輸入ノ大ナル支那各港ニ冠タリ」(4)といわれており、石炭市場としても上海は中国市場の中心であったのである。

従って、上海石炭市場の動向を明らかにすることは中国全体のそれを知ることでもあり、かかる上海市場における三井物産(以下、物産と略称)の展開は三井財閥の中国市場進出への橋頭堡を築くことにもなったのである。

二、上海石炭市場の展開

1. 輸入高の推移とその特徴

当該時期の上海輸入炭高の動向を全体的に明らかにすることは資料的に困難であるが第1、2表からおよその傾向を看取することができる。すなわち、第一は日本炭の市場占有率の圧倒的な高さと、その輸入高の順調な伸びである。第二は日本炭の中国輸出高のうちでの上海市場の占める位置の大きさである。第三には日本炭のうち三池炭の停

第１表　上海輸入炭種別比較　（単位：トン）

		明治30	31	32	33	34
日本炭	門司炭	103,046	154,078	286,303	275,155	443,692
	三池炭	58,045	106,855	108,642	108,670	102,037
	長崎炭	143,122	140,240	99,532	55,238	75,343
	唐津炭	21,178	30,462	11,417	11,356	21,094
	北海道炭	12,117	—	10,326	371	8,924
	小計(A)	337,508	431,635	516,310	450,790	651,090
	輸出総高(B)	583,524	710,353	949,051	826,053	1,171,176
清国炭		117,708	120,270	112,245	53,781	81,050
外国炭		59,262	116,081	94,254	89,610	107,957
小計(C)		176,970	236,351	206,499	143,391	189,007
合計(D)		514,478	667,986	722,809	594,181	840,097
A／B		57.8	60.8	54.4	54.6	55.6
A／D		65.6	64.6	71.4	75.9	77.5
C／D		34.4	35.4	28.6	24.1	22.5

出典：『通商彙纂』改第５７号　４１ページより作成。
但し、日本炭のうち、輸出総高については吉田虎雄『支那貿易事情』181～2ページによる。

1）清国炭は開平炭及び湖北炭である。
2）外国炭はカージフ炭、ウーロンゴン炭、東京炭、豪州炭等である。
3）日本炭のうち輸出総高は本邦炭の中国への輸出総高を示す。
4）３２年の日本炭小計は合わないがそのままとした。
5）３３、３４年の中国輸入炭総高はそれぞれ、８64,158トン、1,152,959トンと報告されている。（『通商彙纂』第２１７号　５４ページ）

第２表　上海輸入炭種別　（単位：トン）

種類		明治34	37
日本炭(A)		657,090	705,575
外国炭	カージフ炭	39,469	88,244
	豪州炭	21,370	3,189
	東京炭	29,115	41,003
清国炭	開平炭	28,960	8,201
	湖南炭	12,668	25,509
小計(B)		133,080	166,206
合計(C)		790,170	871,781
A／C		83.2	80.9
B／C		16.8	19.1

出典：根岸佶編『清国商業綜覧』第２巻　313ページ。

1）明治３４年の清国炭の銘柄及び合計は前掲第１表と合わないが、そのままとした。
2）ちなみに、明治４３年の中国輸入炭総高は1,443,896トンである（農商務省商務局『1910年に於ケル支那貿易ノ概況』31ページ）。

滞化傾向に比べて筑豊炭の急速な伸張である。第四は清国炭、外国炭がいまだ充分なシェアーを占めるまでに至っていないとはいえ、その日本炭に対する潜在競争力を看過することができない。

第一については日本炭は三〇～三一年の六〇％台から、三二年には七〇％台を占め、三七年には上海輸入炭の八〇％を超すに至るのである。当該時期の上海石炭市場において日本炭は六〇～八〇％を占め独占的支配を確立しているといえよう。

第二については明治三五年の一資料がつぎのようにのべている。(5)

清国に於ける本邦炭の仕向地は概ね上海にして、此他芝罘、牛莊等に輸送するもの亦之なきにあらすと雖も尚ほ少額なり、蓋上海は東洋に於ける商業上枢要なる一港にして船舶の輻輳、工業の繁盛、香港の次に位し、毎年同港に出入する船舶は漸次其数を増加するのみならず支那沿岸の諸港に回送する石炭の如きも同港より回送するもの多きを以て、毎年外国より同港へ出入する石炭の総額は六十万噸以上にして、而して本邦炭は其輸入の約七割を占むると云ふ。

日本炭の中国市場への輸出高は三四年には一一〇万トンを超し、上海市場へはそのうち約五六％が輸入されており、日本炭の半数が上海市場向であると捉えることができよう。その理由は一つには石炭需要との関係である。すなわち、のちに明らかにするように中国輸入炭の大半は船舶焚料炭と各種の工場用炭であり、上海市場はいずれにおいても最大の需要口であった。もう一つの理由はすでにみたように上海が中国各地への仲継貿易港としての位置にあったことである。上海は揚子江貿易の中心として呉淞、蘇州、鎮江、九江、漢口、岳州、長沙、沙市、宜昌、重慶等の揚子江沿岸貿易市場の基点であり、その貿易範囲は浙江、江蘇、安徽、江西、湖北、湖南、四川の七省全部、雲南、貴州、河南、甘粛、陝西の五省の大半、山東の南半、福建の北半の一四省にわたっていた。(6)従って、これらの市場へは上海を通じて再輸出されていたのである。ちなみに第3表は三四～三六年の上海輸入炭の動向をみたものであるが、三六年を例にとれば輸入炭総高八五五、四五九トンのうち、三九六、五六四トン（四六％）が内国市場に再輸出されており、上海市場への純輸入は四一七、四六五トン（四九％）であった。このような上海の中国貿易上に占める位置が日本炭輸出の半数を上海市場に集中せしめる基本的要因であったのである。

つぎに第三の特徴については三〇年の日本炭輸出高のうち門司炭は三〇％、三池炭一七％の割合であったものが、三一年にはそれぞれ三五％、二四％となり、三二年には門司炭は五五％と急増する。これに対し三池炭は二一％に減少する。さらに三三年には門司炭は六一％を占め、三池炭は二四％と微増する。そして三四年には門司炭が六八％とその輸出高を急増させるのに対し、三池炭は一五％と急減し、その絶対額も漸減するに至るのである。このような上海輸出日本炭の炭種構成の推移はいうまでもなく国内石炭産業発展の比重が三池から筑豊へと移行していることの直接的反映である。このことはまた、三井資本にとっても二九年山野炭礦、三三年田川炭礦、三四年本洞第二炭坑の買収によって、従来の三池炭中心から筑豊炭への進出を促進せしめることにもなるのである。

最後に第四については外国炭、清国炭の比重が三七年においても二〇％を切っており、いまだ充分なシェアーを占めていないとはいえ、日本炭の競争炭として軽視できないものであった。(7)日露戦争以前の上海市場における日本炭の競争炭はカージフ炭、開平炭・湖南炭・湖北炭などの清国炭、豪州炭、東京炭、等であり、その動向は日本炭の輸入高に影響を与えることになったのである（後述）。第4表は明治三〇、三一年における上海輸入炭の推移を炭種別・月別にみたものである。われわれはこの表から上海輸入炭の月別変動の激しいことを指摘することができるが、ここで、三二年二月九日付の上海総領事館報

第3表　上海輸入炭の動向　（単位：トン）

	明治34	35	36
外国輸入	758,900	708,566	855,361
内国輸入	147	718	98
外国再輸出	61,552	49,870	51,430
内国再輸出	339,195	355,247	396,564
純輸入	358,300	304,167	417,465

出典：根岸佶編『清国商業綜覧』第2巻　312ページより作成。

第4表　明治30、31年上海輸入炭種別・月別比較　（単位：トン）

	日本炭		英国炭		豪州炭		開平炭		東京炭		漢口炭		其他		合計	
	明治30	31	30	31	30	31	30	31	30	31	30	31	30	31	30	31
1月	29,042	46,288	−	−	−	−	−	200	1,600	1,100	−			−	30,642	47,588
2月	48,237	43,198	2,484	7,100	−	1,380	−	800	1,230	2,000	−			−	51,951	54,478
3月	15,724	39,090	−	4,830	−	3,980	1,850	4,446	−	3,820	−			−	17,574	56,166
4月	13,825	18,391	3,150	5,860	−	−	3,750	8,617	1,700	1,783	−			−	22,425	34,651
5月	27,418	25,178	−	−	−	1,100	5,950	6,900	2,340	2,033	−			−	35,708	35,211
6月	32,876	38,739	−	6,884	−	1,500	7,250	8,600	−	2,788	−			−	40,126	58,511
7月	32,039	37,366	−	3,200	−	5,400	12,700	9,150	−	3,540	380			−	45,119	58,656
8月	20,046	20,118	−	−	2,807	3,050	7,174	11,535		1,700	−			1,725	30,027	38,128
9月	31,883	35,447	−	−	1,200	−	12,520	9,983	3,700	2,260	−			−	49,303	47,690
10月	30,054	33,491	1,465	−	−	−	1,500	6,300	−	960	−			−	33,019	40,751
11月	14,309	8,934	−	−	−	−	8,560	2,370	1,712	−	−			−	24,581	11,304
12月	30,180	45,614	−	−	−	−	3,300	−	2,122	−	−			−	35,602	45,614
合計	325,633	391,854	7,099	27,874	4,007	16,410	64,554	68,901	14,404	21,984	380			1,725	416,077	528,748

出典：『通商彙纂』第125号　3〜4ページより作成。

1）漢口炭の31年、其他の30年は記載がない。

告から三一年中の上海輸入石炭商況の動向についてみておきたい。上海総領事館は三一年中の石炭商況の月別推移をつぎのようにのべている。(8)

一月中　一タビ膠州湾ニ事アリテ以来、東洋ノ風雲益々不穏ニシテ風評百出シ、局ニ外交ニ当ル者此間ノ気配ヲ誤マラズ、英仏独ノ艦隊ハ各々本国政府ノ命ヲ奉ジ北京駐在自国公使ト互ニ気脈ヲ通シ、西ニ東ニ出没変幻、為メニ石炭ノ需用頓ニ増加シ、従テ之ガ気配ヲ強メ本邦炭ノ如キモ悉皆売切レノ姿トナリ、遂ニハ一噸ニ付八両五匁台ノ高直ヲ唱ヘ出スニ至リ殆ンド前年一月ニ比スレバ三両方ノ騰貴ナリトス、然リ而シテ英国炭ハ軍艦用トシテ或ル一部ニ貯蔵セラルヽノ外、会テ市場ニ顕ハレザルノミナラズ、其他濠州炭ノ如キ在荷絶ヘテ無ク、開平炭亦北部運輸不通ナルヲ以テ此処ニ供給スルヲ得ザリシ有様ナルニ搗テヽ加ヘテ此際本邦上海間運賃ハ多少低落シ、門司長崎ヨリ一弗五拾仙台トナリタルヲ以テ、是レ別表記載ノ如ク僅々三拾日間ニシテ本邦炭ノ輸入約四万七千余噸ノ巨額、即チ昨卅一年中最大額ニ達シ、本邦営業者ノ此機ニ乗ジ極力之ガ出荷ニ努メタルト当市場ハ独リ本邦炭ノ占ムル所トナリシ所以ナリトス

二月中　一月ニ尋ギ不相変需用隆ンニシテ軍艦運動ハ依然繁劇ヲ告ゲ、英国ハコロンボ以東ノ石炭ヲ買占メタリ、当国政府ハ本邦炭ヲ買収セントスルノ傾向アリナド是等ハ直接本邦炭ノ需要ヲ増シ、搗テ、当時本邦産地ニ於テハ旧正月来金融必迫ノ為メ小坑主ノ売放チ、薄資石炭商ノ安直売退キ等アリテ門司其他ニ於テ在荷多ク、為メニ自ラ当地ヘノ輸入ヲ一層増加シ来リ、乃チ別表輸入表記載ノ如ク四万四千余噸ノ多額ニ達シタル所以ナリトス、但シ相場ハ低落ノ模様見エズ

三月中　天津ノ航路ハ開ケ牛荘ノ初航期モ漸ク近寄リ、順次北方行ノ汽船増加シ、従テ石炭ノ需用日ニ多キヲ加フルノ矢先ナレバ、相場ハ強気ニシテ唐津一等炭ノ如キ七両七匁ニ売レ行キ、加フルニ北部ノ風雲ハ不穏ニシテ香港ノ如キモ本邦炭ノ需用ヲ増シテ輸入増加シ、到ル処石炭ノ需用多キヲ以テ英国炭ノ如キモ非常ノ高値ニシテ殆ンド相場外ノ高唱ヲナシ、即チ前記二種ノ原因相依リ相集リ本月中ノ各種石炭輸入総額五万六千余噸（内本邦炭四万噸）ニ昇リ、前年輸入総額一万八千噸ニ比スレバ約三倍増ナリトス、是レ三月頃ニ至レバ北方航路開ケ石炭ノ需用稍々多キヲ加フルハ通例ナルモ、独リ是ノミニテハ恐ク昨三十一年仝月ノ如ク五万六千余噸ノ巨額ニ出デ難カル可ク、不相変二万噸内外ヲ上下スルニ過ギザラン、以テ前年十一月独逸膠州湾占領以来石炭需要ノ如何ニ増殖セルヤヲ推知スルニ余アラン

四月中　上等炭ハ相変ラズ東洋風雲ノ不穏ヲ気構ヘテ強気ヲ帯ビ居レリ、尤モ運賃騰貴其他二、三ノ原因ニヨリ多少本邦炭の輸入ヲ減ゼシモ、独逸ノ如キハ膠州湾貯蔵ノ為メ一年ヲ期シ毎月本邦炭三千噸宛買入ヲ申込ミタルアリ、其他露英共ニ一朝事アル時ハ英炭ヲ望ミ取リ難キカ故ニ此際盛ンニ買進ミ、旁々本国サウスウエールスニ於テハ石炭工夫ノ同盟罷工アリテ其勢猖獗漸次蔓延セントスルノ模様アリ、随テ早晩英炭輸入ノ減却ヲ来スナル可ク、且ツヤ此時米国、西班牙間外交益々難局ニ向ヒ、将サニ干戈ヲ戦ハサントスルノ場合ナリシヲ以テ石炭ノ需要層一層ノ度ヲ高メ、香港ニテハ英炭毎噸四拾両ノ高値ニテ取組セラレタルノ有様ナルヲ以テ、当分俄カニ下向トナル憂ハナカルベキナリトハ本月末日ノ状況ナリシ

五月中　サウスウエールスニ於ケル採炭夫ノ同盟罷工ハ英国炭ノ輸出ヲ一時減少セシメ、其結果、五月中当港輸入英炭ノ上ニ顕ハレ、即チ別表掲記ノ如ク仝月中英国炭ノ輸入皆無トナリ、濠州炭亦一般価格騰貴ニ引連レ毎噸拾七両以上ニテ取引セラレシモ、其後間モナク在荷手薄トナリタルヲ以テ月末ニ至リ千百噸バカリノ着荷アル迄

不得已取組見合ハセノ姿トナリ、又一方ニテハ当時外ニハ米西戦争漸ク酣ニシテ米軍桑港ヨリ兵ヲ派セシメテ馬耳拉ヲ占領セントシ、西軍兵ヲ本国ニ求メテ極力之ニ当ラントス、内ニハ沙市暴動事件アリ、寧波ニ温州ニ到ル処人心惶々トシテ其業ニ安ンゼズ、財ヲ蓄フル者ハ皆之ヲ蔵シテ出サズ一般金融界全ク疎通ノ途ヲ失ナヒ、米価益々騰貴貧民愈々苦痛ニ堪ヘザリシ有様ナルヲ以テ何ヅレノ取組モ殆ンド休業ノ姿トナリ、不振ニ不振ヲ重ネ（中略）、石炭ノミハ米西戦争ノ結果、多少運賃ノ騰貴ヲ来セシト雖トモ（門司長崎ヨリ上海迄ノ運賃ハ当時毎噸弐弗ニ拾五仙迄引上ゲタリ）、此騰貴ニ拘ハラズ一般需用増加ノ為メ在荷ハ続々捗ケ行キ、就中、前述ノ如ク英国炭及濠州炭ノ出廻ナキニ因リ、本邦炭及開平炭ヲ仰ガザルヲ得ザルニ至リ、是レ本邦炭ノ輸入衰ヘザリシ主因ナリトス

六月中　相変ラズ本月中モ我邦守備兵ノ威海衛ヲ撤セル、恭親王ノ薨御、米作不出来ノ為メ長江筋ヲ通シ下等民ノ愁聲、当港会審制度改定ニ干スル内外人ノ運動、決算日ニ臨メル二、三実業家ノ破産（当時漢口ニ於テモ弐拾五万両ノ負債ヲ負ヒ不得已逃亡セシモノアリタリ）、米価騰貴ニ基ヅケル貧民ノ騒擾等ノ原因相合シタリシヲ以テ市場ハ益々沈静ニ陥井リ、甚シキ不景気ヲ呈セシガ、既ニ此時ニ至リテハ本邦炭ノ在荷モ饒多ニシテ寧ロ供給ノ需用ヲ超過スル姿ナルニ、上述ノ如ク金融必迫ヲ告ゲ支払日モ差迫リ居リタル為メ買手筋ハ皆々手扣ヘ其他英国炭、濠州炭モ同様不味ナリシガ、輸入ハ不相変相応ニアリテ寧ロ前月ヨリ多カリシ有様ナリ、尤モ例年此候ニ至レバ一時休業シ居リタル各製糸場モ漸次業ヲ始メ、従テ当地工場用石炭ノ消費高ニ於テ多少其量ヲ増加シ居ルハ勿論ナルモ、是レ未ダ以テ当港輸入石炭増加ノ上ニ左シタル影響ヲ及ボサヾラン、是レ畢竟前々月以来ノ好景気ニ連レ本邦産地当業者ノ一時ニ輸入シ来リタル結果ニ過ギザル可シト考フ

七月中　本月ニ入リテハ四明公所事件ニ因リ寧波人一時ニ業ヲ休ミ、而シテ当地石炭商ノ重モナル者ハ何ヅレモ皆ナ寧波人ナルヲ以テ、仝事件ハ直接石炭取組ノ上ニ影響シ本邦炭、英国炭、濠州炭何ヅレモ皆ナ取引甚ダ稀ニシテ相場亦遠カラズ低落ノ傾向ヲ有セリ

八月中　略

九月中　本月ニ入リ石炭ノ輸入多少減退セシモ前々月以来ノ荷蓄ミニヨリ遠カラズ相場ノ暴落ヲ見ルナル可ク、此際買手筋ハ買入ルヽモ捌ケ方ニ差支ヘ、且ツ経済界モ稍々引締リ居リタルヲ以テ各石炭皆々取引尠ナク、旁々一方ニテハ仝月三十日恰モ大支払日ニ相当セルヲ以テ全ク休業同様ノ有様トナリ、層一層ノ不振ニ陥キリ俄カニ復旧ノ見込ナシ

十月中　本月ニ入リ北京政変ノ報一タビ当市場ニ伝ヘラルヽヤ市況再ビ沈静ニ陥井リ、英仏独ノ艦隊ハ各々自国政府ノ命ヲ受ケ或ハ天津附近ニ於テ、又ハ香港海面ニ於テ聚合ノ勢ヲ形ハシ、艦隊ノ運動実ニ繁劇ナリシガ故ニ多少石炭ノ需要ヲ喚起シ、一般市面ノ不活発ニ反シ独リ本邦炭ノ好景気ヲ見、一時停滞シタル在荷モ少シク荷薄トナリタル趣ナリ

十一、十二月中　唯当用筋ノ望ミ取ニシテ捗々敷取引ナク十二月ニ至リテハ自家用石炭ノ増加ニヨリ輸入ニ於テモ其増加ヲ見、在荷多キニ過グルノ有様ナルモ先ヅ清暦正月前ノコトナレバ支払上買手筋ハ寧ロ見合ハスナルベシ

明治三一年という時点ではあるが上海石炭商況の動向がよく示されている。ところでこのような上海輸入炭高を規定する要因はどのようなものであろう。この点について右の上海総領事館報告は㈠小蒸気船と船舶の増加、㈡産業の進歩、㈢政変の影響、㈣一般人民需用の増加、の四つの理由をあげている。(9) これらの原因のうち㈢が主因であることを右の報告はつぎのようにのべている。

前述ノ如ク昨年中（三一年中ー引用者）輸入石炭ノ増加ハ、第一内河航行規則実施後俄カニ増作セル小蒸気船、第二産業ノ発達、其他直接間接ニ種々ノ原因ノ相依リテ此等非常ノ増加ヲ見タルナルベシト雖トモ、此等ハ畢竟附随ノ原因タルニ過ギズシテ昨年中ヲ通ジ一般人心ヲ聳動セシメタル幾多政海ノ波瀾ハ実ニ之ガ主因ナリト謂ハザルヲ得ズ、今其理由ヲ詳述センニ当地ニハ種々ノ製造場アリテ綿糸、蚕糸ヲ首メ燐寸、製紙、製油、羊毛、熟皮、綿繰、造船等ニ至ル迄一々枚挙スルノ遑アラザルモ、此等ヲ通ジ消費スル石炭総額ハ最モ精密ナル統計ニ拠レバ、凡一ケ月壱万噸即チ一ケ年拾弐万噸ニ過ギザルベク、又小蒸気船ノ増加セルモノアリト雖トモ、此方面ノ需用ハ寧ロ小額ニ止マルヲ以テ直接十万噸ノ進捗ヲ来シ能フモノニアラズシテ、一昨年膠州湾ニ事アリテヨリ以来引続キ米西戦争、沙市事件、寧波事件、北京政変等踵ヲ接シテ起リ、其間英米仏独露西ノ艦隊ハ日夜東西ニ奔走シ、南北ニ馳駆シ出没変幻尤モ努メタリシヲ以テ、此等各国軍艦ノ消費セル石炭ハ実ニ巨額ニ達シ、就中、英露独ノ如キハ他日ヲ慮リ此際切リニ買収スル所アリシヲ以テ石炭ノ需要頓ニ増加シ、随テ其気配ヲ高メ輸入日ニ多ク月ニ増進スルノ有様トナリ、遂ニ前年ニ比シ約十余万噸ノ増輸入ヲ見、我本邦炭ヲシテ一躍四百万円以上ノ輸出商品タラシムルニ至リシモノタルハ余輩ノ堅ク信ジテ疑ハザル所ナリ

すなわち、ドイツ軍の膠州湾占領（三〇年一一月）、米西戦争勃発（三一年四月）、沙市暴動（三一年五月）、寧波事件・四明公所事件（三一年七月）、旅順・威海衛の解放、北京政変（三一年八月）、三門湾事件（三二年七月）、北清事変（三三年五月）等の清国をめぐる帝国主義諸列強間の軍事的・政治的諸事件が上海輸入炭高の動向を左右する基本的要因であったことを右の報告は如実に示している。(10)

そしてこれはまた、後述するように上海輸入炭の需用口の最大のものが船舶焚料炭であったことと密接に関連している。

この点を物産の三一年石炭取扱高の拡大との関連でみておこう。(11)

物産の明治三一年度の石炭取扱高は三〇年度に比して八六、一六六トン、二、二三八、二一四円の増加を示し、これは三一年度日本石炭の総輸出高の約三〇％を占めるにいたったのであるが、その理由は国内における鉄道、船舶、諸工業の需要の増加によるもののほかに、つぎのような東アジア石炭市場の動向に規定されたものであった。

第三　膠州港占領事件ヨリ列国間ノ形勢穏ナラズ、英国政府ハ東洋ニ於テカーヂフ石炭ノ買占ヲナシタル為メ英炭ノ騰貴ニ伴ヒ一般ノ炭価騰貴シタルコト

第四　米軍マニラヲ占領シタルニ付、石炭ノ需要大ニ起ルベシトノ思惑盛ナリシコト

第五　カーヂフ炭坑ニ坑夫ノ罷工起リ五ケ月間継続シタルヲ以テ、英炭売買ハ九月ニ至ルマデ中絶ノ姿ヲ呈シ、従ッテ他炭ノ需要ニ影響ヲ与ヘタルコト

第六　上半期ニ於テ本邦輸入米運送ノ船舶多カリシ為メ、其焚料積取ノ増加セシコト

以上各種ノ原因ニ由リ内外共ニ需要ヲ増加シ、殆ンド未曽有ノ好況ヲ呈シタリ

然レトモ之レガ為メニ一方ニハ印度ベンゴール炭大ニ産額ヲ増加シ、新嘉坡市場ニ現ハレ東京炭又盛ニ香港市場ニ輸入セラレ、我粉炭及切込炭ノ一大強敵トナリ、開平炭ハ上海市場ニ出テ、重ナル用途ヲ充タス等大ニ東洋各炭坑ノ採掘増加ヲ奨励セリ、之ヲ以テ年末ニ近クニ従ヒ各需用地ニ於ケル着炭ノ大ニ増加スルト共ニ、一方ニハ東洋風雲漸ク穏静トナリ、カーヂフー同盟罷工亦和解シ、米西ノ干戈亦収マル等着々需要収縮、炭価下落ノ徴ヲ呈シ来リタレバ、各地共ニ炭況不振ヲ叫バザルヲ得ザルニ至レリ

然レトモ、当社ハ昨年末ノ残約定ヲ履行スルト共ニ各地共先約定ヲ努メタルヲ以テ、一般ノ炭況ノ盛ナルニ際シテハ能ク其好果ヲ収メ、前記ノ如キ多数ノ売炭ヲナシ得タルノミナラズ、次年度ノ焚料約定ハ例ニ従ヒ各地ニ於テ締結シタル高、凡四十万余屯ニ達シタリ（後略）

右にみた上海輸入炭の促進要因が物産の石炭取扱業の展開のなかに具体的に作用していることをわれわれは右の報告から知ることができる。ところで、上海輸入炭の動向を単に三一年の段階にとどめず、ロングスパンにおいて捉えたとき清国資本主義の発展との関係を重視しなくてはならない。この点について右の報告は清国産業資本の発達を鳥瞰しつつつぎのようにいう。「即チ此等重要輸出品ハ勿論其他諸種ノ工芸品ニ於テ一般製造額ノ増殖セシハ直接石炭需要ノ増進ヲ招キ、石炭需用ノ増進ハ其輸入増加ト価格騰貴トヲ来セシ所以ナリトス、而シテ此原因タルヤ今後月ヲ改メ年移ルニ従ヒ益々其度ヲ増進センハ勿論ニシテ、遂ニハ生糸マレ綿糸マレ、羽毛、皮革、燐寸、製紙等諸種ノ製造ニ巨額ノ石炭ヲ需要スルニ至ルハ疑ヲ容レザル所ナリ」と。製糸業、紡績業などの産業資本の発展が工場用炭としての輸入炭の需用を増大せしめる第二の要因であった。第5表は日露戦争前後期の清国

第5表　新式工場設立年別及地方別

種類	一九〇二年前	一九〇三年	一九〇四年	一九〇五年	一九〇六年	一九〇七年	一九〇八年	北清	中清（江蘇を除く）	南清	江蘇	合計
生糸	一	一	一		二				一		四	
紡績織布	四		一	四	六	七	二	四	九	二	九	
製粉	四	一		三	一	二	一	二	二		八	
煉瓦及陶器			二	一	四	三	一	一	九	一		
巻煙草	二			三	五		一	七		一	三	
精米	一				一	一	二		三		二	
電燈			三	二	二			二	二	一	二	
豆粕搾油	一			二	三	三		一	四		四	
石鹸蠟燭	一			一	一	二	一	三	一		二	
燐寸	一					一	一		二		一	
玻璃			一	一				一	三			
建築土木	一		一		一	一	二	三			三	
機械製鉄	一								二			
雑業	五			二	八	六	二	五	四	四	一一	

出典：根岸佶編「支那工業ノ前途」（其三）
（『東亜同文会支那調査報告書』第1巻第2号）9ページによる。

における新設諸工場を示したものであるが、とくに日露戦後における産業資本の顕著な発展を指摘することができる。しかも地域的には上海を中心とする江蘇地方、漢口を中心とする中清地方に集中しており、上海、漢口は清国「工業ノ総滙タル」地位にあったのであり、(12) このことは同時にまた、工場用炭としての上海輸入炭増大の条件を形成することになったのである。

つぎに、㈠の小蒸気船と船舶の増大については三一年三月の「小蒸気船内河航行規則」の公布が小蒸気船の需要を増大させ、また、外国航路航行船の増加が輸入石炭の増加をもたらしたのであった。これと同時に、通常三月は北清航路が再開され、北清貿易の拡大が上海港へ船舶を集中させ、それが上海への輸入炭を増加させる要因ともなっていたのである。

さらに、㈣の一般人民需用の増加については英、米、仏、日の居留地の拡張と居留外国人の増加が「直接石炭需要額ノ増加ヲ招キ、消費高ノ増加ハ勢ヒ石炭ノ上ニ影響ヲ及ボシ、遂ニ昨年ノ如ク其他二、三ノ原因ト相合シ拾余万噸ノ輸入増加ヲ生ゼシムルニ至」ったのである。

以上が上海輸入炭増大のいわば積極的な要因をなすものであるが、同じく輸入高を増大せしめるとしても消極的な要因もあった。たとえば、わが国における景気変動＝金融輻迫が小炭坑主の乱売をもたらし、また、小資本の石炭商が安値売込みをおこなうために門司その他の積出港の滞荷が増加し、それら上海輸入炭の増大をもたらす結果となったのである。この場合は当然日本炭の値崩れをおこし石炭相場を下落せしめるのが普通であった。

また、英国サウスウェールズにおける坑夫の同盟罷工（三一年四月）によってカージフ炭の輸入が途絶（三一年五月）するなどの産炭地における諸条件が上海市場における各国炭の動向を左右する要因ともなっていたのである。さらに、これらの要因に加えて為替相場・運賃相場の下落が上海輸入炭、従って日本炭輸入高を増大せしめる原因ともなっていたのである。

これに対して逆に上海輸入炭を減少せしめるマイナス要因はどのようなものであったのだろうか。これは当然、さきの促進要因の裏返しになるのであるが、明治三二年五月二四日付上海総領事館報告はその原因をつぎの五点に求めている。(13) ㈠帝国主義列強間の武力衝突の予想が外れたこと、㈡各種工場就中製糸・紡績業の不振、㈢上海・天津航路船需用石炭の減却、㈣酒・醤油製造の途絶、㈤各炭山の掘過き、及新炭山採掘事業開始、である。これは三二年一～五月における上海石炭市況についてみたものであるが、三一年はすでにみたように前年来のドイツ軍の膠州湾占領事件、米西戦争、旅順・威海衛の開放、北京政変が発生し、各国艦隊が「種々ノ手段ヲ取リテ常ニ四方ニ奔走駆駛セルヲ以テ石炭ノ需要頓ニ増加シ、兼テ貯蔵セル英炭ノミニテハ到底需用ニ応スル能ハサルヨリ本邦炭ヲ使用シ始メ、本邦商人ハ此機投スヘシトナシ続々本邦炭ヲ当地ニ運送シ来」ったために「本邦輸入石炭ヲシテ一躍五拾余万噸ノ多額ニ達セシメ、前古未見ノ隆盛ヲ顕出」したのであった。ところが三二年に入り「各石炭商ハ兼テ其予想ニ反シ、支那ハ到底欧州強国ト戦端ヲ開クノ気力ナキノミナラス、世人ノ予想セル日露間ノ衝突モ事実トナリテ顕ハル、模様ナク、先ツ東洋ハ当分平和ノ地歩ヲ保持スルノ姿ナルヲ見テ取リ此節ニ至リ弗々其貯蔵石炭ヲ売放チ始メ」たために、「昨年今日ノ好気配ニ引換ヘ在荷弥カ上ニ蓄ミ、殆ント持扱方ニ困シミ居ルノ有様、昨今一層ノ痛苦ヲ感シツ、アル」という状況をもたらしたのであった。これが「本年（三二年ー引用者）本邦炭不振ノ重要原因」であったのである。

㈡の紡績・製糸業の不振は「各種工場中最モ多ク石炭ヲ需用スルハ固ヨリ紡績」であり、「此紡績業タル本邦炭唯一ノ佔客」といわれているだけに、日本炭の輸入にとって打撃となるものであった。製糸業

も同様であり、「如此製糸紡績既ニ不振ニ陥リ、本邦炭ノ需用少シク減衰セルト之ト共ニ各種ノ工場何ツレモ多少ノ不振ヲ免レサリシトニヨリ、茲ニ愈本邦炭ノ停滞ヲ甚シカラシメ益々売行ノ寛慢ヲ増進セシメ」たのであった。

㈢では上海・天津間の航路船が従来、往復ともに日本炭を積込んでいたのを、「近頃本航路船ハ往航ニノミ本邦炭ヲ需用シ、復航ハ専ラ開平炭ヲ積込」むようになったために、「目下該航路ニ需要スル本邦炭総額ハ従来ニ比シ、先ツ二分一ニ減」ずるに至ったのである。

また、㈣の酒・醤油製造の途絶は「従来、此等製造場ニ使用セル石炭ハ主トシテ其供給ヲ本邦ニ仰キ、就中、本邦下等炭ヲ好ンテ買求セシ者ナルカ、昨今カ此等製造家ハ何レモ収支相償ハサルノ結果、不得已一時製造ヲ中止シ、今後ノ成行ヲ窺居ルノ向モアリテ製造額ノ減却ト共ニ本邦炭ノ需用ヲ減シ、就中、下等炭ノ売行ニ尠ナカラヌ困難ヲ生セシメタ」のである。

㈤については三一年中に清国「採炭ノ上ニ一大進捗ヲ来シ、炭脈炭坑ノ採掘シ初メシモノ十数ニ下ラス、或ハ江西各地ニ、或ハ湖南、湖北各処ニ、又ハ北部牛荘、天津附近ニ、南方福建地方ニ到ル処新炭脈、新炭坑発見ノ聴ヲ聞カサルナク、開平・漢口炭ノ市場ニ顕ハレシモノ亦尠ナシトセス、此等新炭山採掘事業ノ開始、又多少昨今本邦炭停滞ヲ来スノ原因ナリト想ハル」といわれている如く豊富な炭礦資源をもつ清国の国内炭の生産の拡大は日本炭の独占的市場支配を脅やかすものであった(14)(この点は後述)。このほか清国内における景気変動・金融逼迫(それは主として農産物の不作や、米価騰貴に起因するものであった)による市場沈静、海関税率の変化、通行税などの各種の税制度などが上海輸入炭高を規定していた。(15)

以上みてきたような複雑な諸条件のからみ合いが上海市場への輸入炭の動向を決定する要因となっていた。従って、かかる上海石炭市場の激しい変動にもかかわらず恒常的・安定的な石炭供給を可能とするにはその独占的支配が不可欠であり、それはすでに明治一〇年代から上海市場に進出し、日本帝国主義の先兵としての役割を担いつつあった当該時期の物産にしてはじめて可能なことであったといえよう。

2. 競争炭の動向

第6、第7表は明治三〇年五〜六月、三一年一一〜一二月の各々二カ月間における上海輸入炭の銘柄を明らかにしたものであるが、きわめて多様な炭種が輸入されていることがわかる。その多くは日本炭で占められている。上海市場における日本炭の競争炭には英国炭(カージフ炭)、豪州炭と、開平炭、湖北炭、湖南炭などの清国炭があり、日露戦後には撫順炭、山東炭、萍郷炭、印度炭などが新たに加わることになる。以下、上海市場における日本炭の競争炭の主要なものについてみておこう。

英国炭カージフ炭で炭質がよく、「品質上等ニ過ギ支那人ノ生活程度に合」(16)わないという市場条件に規定されて、「軍艦用若シクハ欧州航路ノ汽船ノミニ用」いられていた。その理由は「英炭ト日本炭トノ優劣ハ殆ント二ト一ノ比ニシテ本邦炭百噸ヲ要スル航路ヲ英炭五十噸ニテ足リ、固ヨリ英炭、日本炭ノ間ニ価格ノ差違アリテ目下ノ相場本邦炭ハ英炭ノ二分一ニモ及ハサルノ状ナルモ、軍艦其他欧州航路ノ如キ長航路ニアリテハ専ラ少量ニシテ効力多キ英炭ヲ使用シ、勉メテ貨物ノ多カラン事ヲ計リ、石炭価格ノ廉不廉ヨリハ寧ロ此点ニ於テ却テ利益ヲ占メントスル」(17)ところにあった。すなわち、英国炭は炭質がよく、従って炭価も高く、その経済性からいっても工場用、一般地売、小蒸気船用には向かず、軍艦用と遠洋航路の船舶焚料炭に需要が限定されていたのである。

第６表　上海輸入炭種別比較　（明治３０年５～６月）

到着日	種　類	噸数	到着日	種　類	噸数	到着日	種　類	噸数
明治30年5月6日	雑種日本炭	2,262	5.24	三池炭	1,202	6.15	門司炭	1,750
5.7	福母炭	978	5.28	福母炭	1,024	6.16	開平炭	250
5.9	雑種日本炭	650	5.29	開平塊炭	700	〃	長崎炭	1,224
〃	〃	800	〃	日本雑炭	1,000	6.17	日本雑炭	1,637
5.12	唐津炭	962	5.30	ケベオ炭	840	6.18	開平炭	900
〃	ケベオ炭	1,500	5.31	開平塊炭	1,100	〃	開平雑炭	2,000
5.13	唐津塊炭	2,400	6.1	唐津炭	1,924	6.20	三池切込炭	1,092
5.14	三池炭	2,022	6.2	キリゴミ炭	2,085	〃	日本雑炭	1,450
〃	雑種日本炭	1,000	〃	長崎炭	700	6.23	開平炭	2,000
5.15	〃	962	6.3	雑種日本炭	1,894	〃	日本雑炭	1,730
5.16	開平塊炭	1,100	〃	福母炭	858	6.24	大ノ浦炭	1,700
5.20	雑種日本炭	1,100	6.4	田川屑炭	880	〃	長崎炭	1,104
5.21	長崎屑炭	1,557	〃	鯰田屑炭	1,405	〃	唐津炭	1,439
〃	長崎塊炭	259	6.5	三池炭	1,741	6.26	日本雑炭	535
5.22	長崎炭	1,228	6.6	長崎炭	1,010	6.27	開平粉炭	1,000
〃	三池炭	1,060	6.11	田川屑炭	1,750	6.28	日本雑炭	2,225
5.23	門司炭	1,460	6.14	開平雑炭	1,100	6.30	三池炭	1,250
〃	門司塊炭	639	〃	長崎炭	1,100		合計	69,578
〃	門司屑炭	990	6.15	〃	1,050		一日平均	1,932

出典：『通商彙纂』第６９号、第７０号、第７１号より作成
1）雑種日本炭と日本雑炭は同一内容を示すと思われるがそのままとした。

第７表　上海輸入炭種別比較　（明治３１年１１月～１２月）

到着日	種　類	噸数	到着日	種　類	噸数	到着日	種　類	噸数
明治31年11月12日	鯰田炭	1,200	12.1	門司炭	700	12.20	本邦雑炭	1,100
〃	本邦雑炭	1,139	12.4	本邦雑炭	1,221	〃	三池粉炭	860
11.13	三池粉炭	2,081	12.5	〃	1,650	〃	三池炭大塊	1,140
11.15	〃	1,752	〃	〃	1,200	12.21	本邦雑炭	2,185
〃	〃	871	12.6	三池塊炭・市村炭	1,940	〃	鯰田塊・粉炭	1,285
〃	三池炭	432	〃	本邦雑炭	832	〃	本邦雑炭	1,600
11.17	鯰田炭	1,060	12.9	三池粉炭・市村塊炭	1,800	12.22	市村塊炭	1,620
11.18	開平炭大塊	900	12.11	鯰田炭	1,291	〃	※	490
11.22	本邦雑炭	2,260	〃	本邦雑炭	2,107	12.23	本邦雑炭	1,490
11.24	三池粉炭	1,870	〃	〃	670	12.27	〃	834
〃	門司炭	1,380	12.17	唐津塊炭	902	12.28	〃	1,949
11.25	門司炭大塊	1,766	〃	唐津粉炭	442	12.29	〃	1,588
〃	本邦雑炭	1,140	12.18	三池屑炭	1,681	〃	〃	2,043
11.27	開平炭大塊	670	〃	市村塊炭	337	〃	門司炭	1,738
12.1	本邦雑炭	2,320	12.19	本邦雑炭	1,071	12.31	本邦雑炭	1,807
〃	〃	700	〃	門司炭	1,100		合計	64,135
〃	〃	890	12.20	本邦雑炭	1,031		一日平均	2,466

出典：『通商彙纂』第１２０号、第１２１号、第１２３号より作成。
1）※は炭種不明

従って、「英国炭ハ軍艦用トシテ或ル一部ニ貯蔵セラルヽノ外、会テ市場ニ顕ハレザル」(18)という状況にあるがゆえに、その輸入高は一九世紀から二〇世紀初頭にかけての東アジアをめぐる帝国主義列強間の軍事的・政治的諸事件にもっとも強く影響されていたのである。たとえば、米西戦争の勃発した明治三一年四月の上海市場において、英国炭は「其最モ好況ヲ極メタルモノナリ、殊ニ露国ハ一朝事アル時ハ英炭ヲ望ミ取ル難キカ故ニ盛ニ買進ミ、英モ亦前々ヨリ東洋ノ英炭ヲ買占メテ不時ニ備ヘントシ、為メニ香港ニ於テハ非常ノ高直ニシテ、一噸四十弗ニテ手合セアリタル趣ナリ、故ニ当地ニ於テモ昨今英炭ノ需用アレモ、一噸ニテモ容易ニ得ラレズ相場モ強気ニテ、市場取組相場ハ一噸二十六両ノ高直ヲ唱フルニ至レリ」(19)という好況を示しているのである。

しかしながら、一方需要先がかかるものだけに平時においては「元来本炭ハ当地ニ於ケル需用ノ区域甚タ狭少ニシテ其ノ額亦鮮少ナルモノナレハ、其ノ炭況ニハ変化極メテ少ナク毫モ記スヘキコトヲ認メス、本年（明治三五年ー引用者）初旬以降九月末日ニ至ル本炭ノ輸入高ハ約一万五千噸ニシテ格別ノ増減ヲ認ムル能ハス」(20)「目下ノ相場ハ倉渡一噸ニ付十八両ニシテ、本年（明治三六年）一月以後変化ナク一定ノ相場ヲ維持シ居レリ、本年ノ商況ハ三月上旬ニ極少量ノ取引アリタルノミニシテ他ニ記スヘキコトナシ、目今ノ在荷ハ約一万二千噸ヲ貯蔵セリト聞ク(21)」ということにもなったのである。このような上海市場における英国炭の動向は日露戦後においても基本的に変化せず、日本炭、清国炭に比べると停滞化傾向を示していたのである。

豪州炭　明治三〇年一〇月の三井物産石炭諮問会議において、「ニューカッスル粉炭ハ既ニ上海ノ工場ニ入リ始メタリ、是レ我石炭ノ功敵手ナル」(22)と報告されていた豪州炭の動向についてつぎにみておこう。上海市場における豪州炭輸入高は右の物産石炭諮問会議の予想にもかかわらず、当該時期を通じてそれほどの伸びを示していない。たとえば、明治三六年三月の上海領事館報告はシドニー炭の市況について

「去月（明治三六年二月）中旬頃約千九百噸ノ入津アリ、当時市況大ニ引立来リ可ナリノ取組ヲ見タルモ、其後昨今ニ至ル商況ハ頗ル沈滞ノ状ヲ呈シ、取引殆ント杜絶シテ市場閑散ノ有様ナリトス」(23)とのべており、いまだ、豪州炭は上海市場において充分展開するに至っていないのである。その理由は炭価が高いこと（右の報告時における倉庫渡相場は噸当り一二両）にもよるが、当該時期の豪州炭の輸出市場の中心が新嘉坡におかれていることに主として起因していたのである。(24)

開平炭　当該時期の上海市場における日本炭の最も強力な競争炭は清国炭であったが、日露戦前においては日本炭の独占的市場支配と清国石炭産業そのものの未発達に規定されていまだ十分な展開をみるに至っていなかった。(25)しかしながら開平炭、撫順炭、山東炭　萍郷炭などに代表される清国炭は炭質において日本炭に劣っているわけではなく、従って日露戦後に急速に発展する清国石炭産業の動向によっては日本炭の独占的支配をおびやかす「好敵」となりうるものであった。明治四一年の一資料はこのような清国石炭産業の動向についてつぎのようにのべている。(26)

支那ハ元来石炭ニ富ミ十八省中殆ド之ヲ産出セザルノ地ヲ見ズ、現時我邦ハ東洋ニ於ケル石炭ノ最大産地ナリト称スト雖モ、九州ノ最大炭田タル三池炭坑ノ如キモ其区域僅ニ三千余町歩ニ過ギズ、又北海道ノ最大炭田ナル石狩ノ如キモ其鉱区南北二千余町ニ上ラズト云フ、之ニ反シテ支那炭田ノ広大ナル実ニ驚ク可キモノアリ、即チ山東省沂州ノ炭田ハ其面積二百六十万里ニシテ、山西省ノ西部ニハ一万三千五百方里ノ無烟炭田アリ、其東部ニハ亦稍ヤ之ト匹敵ス可キ泥炭田アリ、湖南省ノ東部ニハ二千七百七十万哩ノ石炭礦アリ、四川省ノ中央部及北部ニモ亦数多ノ炭脈アリ、直隷省開平炭鉱、安徽

省宣城炭田モ盛ニ採炭セラレ満州ニ於テモ既ニ開掘ヲ見、又将来ニ開掘セラレントスルモノ数ケ所アリ、其他各省ニ存在スル大小炭田ハ一々枚挙ニ遑アラズ、而シテ此等無尽蔵ナル炭鉱ハ支那人或ハ爾後外人ノ手ニヨリ続々開掘ノ地歩ヲ進メ、又炭坑鉄道等ノ便開クルニ至ラバ忽ニシテ我石炭ノ支那ニ於ケル輸入ヲ杜絶スルニ至ル可キノミナラズ、尚ホ余剰アルニ至ラバ、支那ハ尚ホ海外ニモ輸出スルニ至ル可ク延イテ我炭業界ニ大影響ヲ及ボス可キハ明カナリ、是レ豫メ覚悟ヲ要スベキノ事ナリトス

清国炭は開発が進み運搬手段の発達によっては日本炭を駆逐する競争力をもっていたのである。

まず、開平炭の動向からみておこう。明治三〇年九月一〇日～二二日の一三日間において開平炭は六、八七〇トンの輸入をみており、炭種別では最高を示していたが（第二位門司炭三、五三〇、第三位三池炭三、三五二トン(27)）、日露戦争以前の上海市場における開平炭は「日本炭ニ比シ煤煙少ナク、其価モ三池塊炭ニ比シテ一弗ノ安値ナリ、故ニ日本炭ノ其影響ヲ受クル多キノ観ナキニアラザレドモ、該炭ハ日本炭ニ比シテ火力弱ク船舶機械ニ専用スルヲ得ズ、只僅ニ日本炭ヲ混用シテ之ガ欠ヲ補フ、而シテ招商局ノ如キハ自己所有ノ船舶ヲ派シテ発掘地ヨリ直送スルヲ以テ、自然廉価ナルガ故ニ重ニ開平炭ヲ使用シ来レルモ、未タ日本炭ト競争スルノ度ニ至ラズ(28)」という状況であった。しかしすでに明治三一年には漢口に牛荘、天津を経由して一〇万トンの輸入をみており、(29)北清地方のみならず南清市場への進出の機をうかがっていたのである。

開平炭坑は北清事変の結果、英国が清国政府より取得したもので明治三四年には英国の株式会社となり、英国とベルギーの資本家のシンジケートにより経営されており積入地を太沽から秦皇島に移して船積を容易にするとともに桟橋等の設備を整え、年産二〇〇万トンの出炭計画を建て、日本炭の「大競争者」となることが予想されていた(30)。明治四〇年七月の物産支店長諮問会議において安川雄之助天津支店長は「天津市場ニ於テ開平炭ト競争スルコトハ殆ト不能ニ属スルナリ」「此方面ニ於ケル日本炭ハ開平炭本拠ニ近キ為メ到底競争出来」ないと北清地方では開平炭との競争の困難に直面していることを報告するとともに、開平炭の状況について「従来、一ケ年八十万噸乃至九十万噸ノ出炭ナリシモノモ、必ス百五六十万噸位迄ハ出炭スルニ至ラン、而シテ此ノ増加シタル高ハ上海或ハ南清ニ輸出シ此地方ノ需要ニ対シテ供給ヲ試ミルコトナルヘシ、此ノ如ク開平炭ノ将来ハ益々発達ヲ見ルニ至ルヘク（中略）、我社ノ商売トシテ此方面ニ石炭ヲ売込ムコトハ先ツ絶望ト見ルノ外ナシ」とのべているが(31)、日露戦後の天津を中心とする北清地方においては開平炭の支配力が強まっていることをよく示している。

このように開平炭は北清地方におもに売捌かれていたが、日露戦争前期においてもすでに上海市場に進出しており（第8表）明治三七年

第8表　上海輸入開平炭

年次	輸入噸数	価額
明.30	69,785	418,710
31	65,319	391,914
32	58,911	353,466
33	9,188	57,884
34	28,966	196,969

出典：『通商彙纂』改第57号
42ページ。
1）価額単位は海関両。

には四万六千トン、三八年上季には二万八千トンが上海に輸入されていた(32)。三九年の報告では一ケ年六万五千～九万トンが輸入されるとのべられているが、(33)四一年の報告では一ケ年生産高一三〇万トンのうち一〇～一二万トンが輸入されており、「此炭坑ハ相当ニ純益モアル由ニテ大ニ拡張ノ計画モ為シツヽアレハ、将来ハ日本炭ノ競争炭トシテ注意セサルヘカラサルモノナルヘシ」とされている。(34)

このように開平炭は「其炭質ハ可ナリ良ク一度焚慣ルレハ他種炭ハ使用セラレス(35)」といわれ、その炭質においても十分日本炭と対抗しうるものであり、その市場も北清地方のみならず上海以南の中・南清地方に拡大される傾向にあった。その原因は北清地方における開平炭と撫順炭の競争にあった。明治四一年九月の物産第五回石炭協議会の席上、上海支店の江原吉之助は「上海ニ就テ一ツ申上ゲタイノハカイピン炭ハ非常ナ勢デ膨脹シテ輸入ヲ増加シツヽアル、一ツハ北清ニ於ケル撫順炭ノ圧迫カラ競争シタ結果已ムヲ得ズ南清、芝罘、上海ニ販路ヲ求メ子バナラヌ事ニ成ッタノデ其方針ニ向ッテ進ミツヽアルト思フ、是レナドハ来年度ノ我々ノ大口契約ニ対シテ非常ナ妨ゲニナルト思フ(36)」とその状況を報告しており、開平炭の上海市場進出による日本炭との競争は避けられないものとなりつつあったのである。明治四三年発行された一資料はこのような開平炭の動向をつぎのようにのべている。(37)

開平炭ノ窮状（撫順炭ニ圧迫セラル）

両者の勢力範囲　開平炭坑ハ北清事変ノ際外国人ガ支那政府ヨリ取得シタルモノニシテ、爾来英白両国資本家ノシンヂケートノ手ニテ一株拾円、株数百万株、資本金壱千万円ヲ以テ事業ヲ経営セルガ、炭質良好ニシテ日本九州炭ノ中以上ニ匹敵シ採掘高モ一日三千五六百噸ニ達スレバ、其ノ勢力ハ仲々侮ルベカラザルモノアリ、サレバ撫順炭ノ現出前ハ北清地方ハ申スニ及バズ南清方面ニ於テモ其ノ売行盛ニシテ一時独舞台ノ観アリシモ、南清地方ハ其後九州炭ノ範囲トナリ先ヅ此方面ニ於テ一大打撃ヲ蒙リタル開平炭ハ更ニ撫順炭ノ競争ニ遭フテ北清地方ニ於テモ亦少カラザル影響ヲ蒙ムルニ至レリ、之ニ反シ撫順炭ハ満州ノ需要ヲ充シタル余力ヲ以テ北清及ビ南清方面ニモ突貫ヲ試ミツヽアル上ニ撫順炭ハ三井物産会社ニテ取次販売ニ従事シツヽアレバ、販売上九州炭ニ圧倒セラルヽ虞ナクシテ遺憾ナク其ノ驥足ヲ展ハスノ便宜ヲ有スルモノアリ。

両者ノ接触点　両者ノ競争漸次激甚ヲ極ムルニ至ルベキハ以上ノ事実ニ徴シテ明カナルガ、其ノ競争ノ最モ劇烈ヲ極ムルハ云フ迄モナク当天津ナリ、天津ニハ各方面ヨリ多量ノ石炭入リ込ミ其ノ高ハ年々百二十万噸ヲ下ラズ、其内ニテ開平炭ハ半数以上ヲ占メ、云ハバ天津ハ開平炭ノ勢力範囲タリシニ、撫順炭ガ些少ナガラモ漸次同地ニ入込ミ来レル為メ多大ノ不利ナル影響ヲ蒙ルニ至リシハ是非モナシ、殊ニ撫順炭ノ採掘高ハ現在一日平均二千噸ニ過ギザルモ、二年後ニ東郷、大山ノ二坑ヨリ発掘スルニ至ラバ、其ノ産額ハ現在ニ倍蓰スベク左スレバ開平炭ノ蒙ムル不利益甚シカルベク、一方九州炭ノ南清ニ於ケル勢力日ニ加ハル上ニ、北清ニ於ケル撫順炭ノ勢力モ亦上述ノ如ク、殊ニ撫順炭ト三井、及ビ三井ト九州炭ノ関係モ特別ノ地位ニ立テルガ故ニ、開平炭ノ地位ハ今ヤ将ニ孤城落日ノ観アリト云フベシ、左レバ開平炭ハ今日ヨリシテ二年後ノ大競争ニ向テ相当ノ準備ヲ怠ラザルハ当然ノ事ニシテ、先年東新松昌洋行（山本唯三郎氏ノ経営ニ係ル）ヲ一手販売者トシテ我国ニモ販路ヲ拡張スルノ計画ヲ立テタリト云フ

清国市場における開平炭の地位が撫順炭、九州炭の進出・拡大によって圧迫されている状況がよく示されているが、ここで注目されるのはかかる開平炭の駆逐が撫順炭と九州炭との関係において「特別ノ地位ニ立」っていた物産の動向と深くかかわっていることである。こう

して日露戦後の開平炭は北清地方において日本炭、撫順炭に圧迫されるとともに、中・南清および東南アジア市場へ販路を拡大する意向を示し、わが国への輸出高も増大していく（第9表）。そしてその出炭高も大正二年には二〇二万余トンに達し（第10表）、急速な発展をとげることになるのである。

撫順炭　撫順炭礦は明治四〇年四月の南満州鉄道株式会社にその経営が移るとともに、明治四〇～五年度にかけて開発計画が実施され、本格的な採炭に入った。その結果、四〇年度には二三三、三二九トン、四一年度には四九〇、七六一トン、四二年度には六九三、二二六トン、四三年度には八九九、一九二トン、四四年度には一、三二四、五二〇トン、四五年度には一、四七一、一二七トンと急速にその出炭量を増加していった。(38) そして、撫順炭の海外輸出市場は「南洋・南支・北支等殆んど東洋各地に普及し、明治四十一年度始めて香港・上海・広東・芝罘その他に二万噸を輸出して以来年々増加し、同四十三年度は二三万噸に達した(39)」のである。このような撫順炭の進出はいきおい中国市場における他種炭、就中、日本炭との競争を激化させるものであった。明治三九年四月の物産の石炭協議会における報告によれば、撫順炭は埋蔵量約八億トンで、一日の出炭量は一千トン、採掘費は貨車乗三円二〇銭であったが、開発計画の実施により一日三千トンの出炭をみるようになれば「貨車乗ノ原価非常ニ割安ニテ凡ソ一円五、六十銭ニテ採掘」が可能となるものであった。また、「一日三千噸ノ出炭アリトセバ一ケ年約四十万噸ノ過剰ヲ生」じ、「左スレバ其炭ハ何処カニ輸出セラルヽカ、或ハ内地ニ使用セラルヽカ、何レニセヨ多少日本炭ニ影響ヲ来ス」ものであった。ここではまだ、撫順炭が「多少日本炭ニ影響ヲ来ス」ものとしてしか位置づけられていないが、同時に「加之満州ニ於テハ石炭ノ価格頗ル高ク平和ノ時ニ於テスラ遼陽、奉天等ニテ十円乃至十三円ナリシ、故ニ此地方ニ於テ販売シタル利益ヲ以テ其余ノ炭ノ販売方ニ流用セラルレハ、或ル場合ニハ非常ニ安直段ニテ競争スルコトヲ得ヘシ」とのべられており、その潜在的競争力が指摘されている。(40) その結果、翌四〇年七月の物産の支店長諮問会

第9表　外国炭輸入高

（単位：トン）

	大正2年	大正3年
開平炭	178,095	391,183
本溪湖炭	60,137	105,596
撫順炭	554,310	508,811
煙台炭	－	100
山東炭	－	4,560
鴻基炭	7,016	52,202
英炭	4,385	4,560
合計	803,943	1,068,967

出典：三井物産株式会社『支店長会議々事録』（大正4年）　物産198ノ323ページによる。

第10表　開平炭出炭高

（単位：トン）

	1913年	1914年
1月	165,000	187,000
2	77,000	178,000
3	185,000	238,000
4	150,000	247,000
5	181,000	298,000
6	143,000	242,000
7	148,000	237,000
8	192,000	249,000
9	150,000	178,000
10	170,000	240,000
11	250,000	207,000
12	213,000	261,000
合計	2,026,480	2,761,695

出典：『支店長会議々事録』（大正4年）物産198／3．44～5ページより作成。

議ではつぎのような上海市場における撫順炭の状況が報告されることになる。(41)

上海方面ニ於テ日本炭ニ対スル外国炭ノ競争ハ、先ツ開平炭ハ今日ノ所左程増加ヲ見ス僅ニ一ケ年三、四万噸乃至五、六万噸ヲ極度トセルカ、茲ニ大ニ考ヘサルヘカラサルハ撫順炭ニシテ、若シ此炭坑カ愈々発達シ来ル場合ニハ、第一芝罘、天津、牛荘等モ無論日本炭ノ販路中ヨリ奪ハレサルヘカラス、加フルニ直接上海ノ市場ニマテ出来リ、即チ、開平炭、撫順炭トニ日本炭ハ圧迫セラレ頗ル激烈ナル競争ヲ見ルニ至ルヘシ、併シ、撫順炭ハ何時頃盛ニ産出スルニ至ルヘキヤ不明ナレト、早晩其時機ニ到着スルコトアルヘシ

こうして、明治三〇年代にはいまだ採掘が進まず、従って中国市場への進出も僅かであった撫順炭は四〇年代に入り、南満州鉄道会社の経営となり、開発計画が実施されるとともに急速に発展した。その結果、販売市場も拡大して中国市場への進出を開始した。その影響は上海市場へもあらわれ、「今後ハ上海ニ於テハ撫順、山東、開平、日本炭ノ競争トナリ、販売上ニモ非常ニ困難ヲ見ルコトアルヘシ」(42)という状況がうまれていたのである。(43)

以上のように当該時期の上海市場における競争炭の動向は基本的には炭価によって左右されるものであり、従って、石炭相場の動向を明らかにすることが上海輸入炭の動向を知る上で不可欠となるが、その前に日本炭の動向についてみておこう。

3. 日本炭の動向

われわれはすでに前掲第1、2表及び、第4、5、6表から日本炭の上海市場への輸入高の推移を明らかにしたが、それは日露戦争前における全体的動向についてであった。そこでみた日本炭の傾向は日露戦後においても基本的には変化していないが相対的にその地位は低下していた。すなわち、明治三六年には上海総輸入高は八九万トンで、そのうち日本炭は七五万一千トン（八四％）であったが、三七年には総輸入高八六万九千トンと若干の減少をみた。これは日本炭の輸入高が七〇万八千トン（八一％）に減少したためである。この日本炭輸入高の内訳は三池炭一五万二千トン（二一％）、筑豊炭三四万四千トン（四九％）、杵島炭・北方炭・徳島炭の合計一五万二千トン（二一％）唐津炭五万八千トン（八％）の割合であった。(44)さらに大正二年の上半季（一～六月）には総輸入高六七万千三百トンに対し、日本炭は四九万三千三百トン（七三％）であった。(45)このような上海輸入日本炭の炭種は筑豊炭、三池炭、唐津炭、北海道炭の各種炭が含まれており、きわめて多様であった。(46)かる上海市場における日本炭の商況について、明治三五年一〇月の上海総領事館報告はつぎのようにのべている。(47)

目下当地ニ於ケル石炭ノ近況ヲ査スルニ本邦炭ノ商況ハ昨今恰モ其ノ好季節ニ向ヒタルコトナレハ、過般来漸次市況ノ変化ヲ促シ幾分ノ生気ヲ含ムニ至レリ、顧ルニ例年夏季ハ一般ニ炭況不振ノ時季ニシテ、只在荷ノ停滞ヲ見ルノミナルカ本年（明治三五年ー引用者註）ハ夏季ニ際シ、偶々本邦当地間ノ運賃大ニ騰貴ヲ招キタルニヨリ其ノ輸入著シク減少シタルヲ以テ当地ノ在荷ハ比較的停滞ヲ見ルニ至ラサリシカ、七月上旬頃ヨリ運賃順次引緩ミタルニ、一方ニ於テハ追々石炭ノ好季節ニ向ヒタルヲ以テ当地ニ於ケル炭商ハ在荷ヲ充実セシムヘキ必要ニ促サレ漸次輸入ノ増加ヲ見ルニ至レリ、今本年一月初旬ヨリ九月末日ニ至ル本邦炭輸入ノ額ヲ見ルニ約四六万三千四百余噸ニシテ、之レヲ昨年同季ノ輸入額三十六万九千七百余噸ニ比スレハ、殆ント十万噸ノ増加ヲ来セリ、思フニ昨年度ノ炭況ハ其ノ下半年ニアッテ為換相場ノ激変ニ依リ甚タ面白カラサル状況ニアリ、

多額ノ供給ヲ契約シ居タル本邦商ハ何レモ莫大ノ損失ヲ蒙リ、遂ニハ閉戸ノ已ムヲ得サルニ出タルモノ頻々タル有様ナリシヲ以テ、其ノ輸入額モ亦従テ減少セルカ、本年ニ入リ為換相場ハ依然差等ヲ有スルト雖トモ之レヲ前年度ニ比スレハ多少ノ下落ヲ来シ、又前年ノ如キ暴変ヲ見ルコトナク、先ツ一定ノ範囲内ニ固定シタルカ如キ観アルヲ以テ、昨年度ノ如ク一朝為換ノ変化ニヨリ直チニ激甚ナル打撃ヲ受クルカ如キ突飛ノ現象ヲ見ルコトナキニ因リ、其ノ輸入ハ昨年ニ比シ割合ニ容易ナルモノヽ如シ、況ンヤ又本年ハ本邦当地間ノ運賃著シク低下ヲ致シタルニ於テヲヤ斯ノ如キ状況ナルヲ以テ目下ノ炭況ハ稍好望ノ位置ニ在リ、輸入高モ亦頓ニ増加セリ、昨今未タ其ノ盛旺ノ区域ニ達セスト雖トモ、二、三週ヲ経過セハ追々其ノ状況ヲ更メ市況ノ躍如タルモノアルニ至ルヘキ欤（後略）

上海市場における日本炭の動向がよく示されているが、注目されるのは日本炭が上海市場で圧倒的な支配力をもっているとはいえ、その市場変動は激しく、必ずしも日本炭の安定的な市場支配が確立しているとはいえないことである。就中、日本炭内部における競争も激しく、それは石炭取扱商間の競争の激化というかたちで顕在化してくることになるのである。しかもそれは具体的には石炭相場の動向によって規定されてくるのである。そこで、つぎに石炭相場の動きについてみておこう。

4. 石炭相場の動向

第11表は当該時期の上海輸入炭相場の動向を明らかにしたものであるがいくつかの特徴を看取することができる。第一は英国炭が圧倒的な高値を示していることである。明治三〇年六月の倉庫渡一トン当り炭価を比較すると、英国炭一三両、豪州炭八両、三池塊炭・高島塊炭

第１１表　上海石炭相場　（単位：両）

炭種	明治30年6月	31年11月	32年1月	33年11月	35年10月	36年10月	37年10月
英国炭	13.0	19.0	19.0	27.0～28.0	16.0	15.0	16.5
豪州炭	8.0	12.0	12.0	12.0～13.0	9.0	9.0	9.0
開平炭		5.8～8.0	5.8～8.0		5.5～11.0	5.5～11.0	4.1～9.5
唐津炭							
大ノ浦炭	5.75～6.0		6.75～7.0				
豊国炭					6.0～7.0	5.0～6.0	5.2～5.8
小松炭							
宮ノ下炭							
三池炭	5.75						
高島炭	5.75						

出典：明治３０～３３年については、『通商彙纂』第７０号、第１２０号、第１２５号、第１７１号、明治３５～３７年については、根岸佶編『清国商業綜覧』第２巻　３１４ページによる。

1）１トン当り倉庫渡値段である。

2）英国炭はカージフ炭である。

3）三池炭、高島炭は塊炭の値段である。

4）１両の為替相場（明治３２年１月現在）は上海両で１円３２銭５厘である。

五、七五両、大ノ浦五、七五〜六両で、英国炭は日本炭の約二倍の高値である。また、三三年三月の相場では英国炭二〇、五両、豪州炭一三両、開平炭七両、日本炭七両で、(48)この構造は変らない。明治三三年一一月には北清事変の影響もあって英国炭は二七〜八両に高騰する。このように英国炭はカージフ炭で炭質がよく、従ってその売込み先も軍艦、及び欧州航路船舶の焚料炭として主として使用され、市場は限定されていたといえる。そして、このような英国炭の市場条件が逆に英国炭の高炭価を維持することを可能としていたともいえよう。第二の特徴は日本炭の炭価が開平炭とともに安いという点である。その意味では上海市場において日本炭と直接的な競合関係にあったのは日露戦争前においては開平炭であった。また、第12表は日本炭のうち、筑豊炭と長崎炭の相場を等級別に明らかにしたものであるが、日本炭においても炭質においてかなりの炭価の差があり、田川、豊国、三池、高島といった三井、三菱資本の産出炭が上海石炭相場においても優位を占めていることに注目しておきたい。と同時に、このような炭価が安いことが上海石炭市場における日本炭の競争力・市場支配力を強める基本的要因となっていることに充分な注意をはらわなくてはならない。なぜならば、わが国の石炭産業のもつさまざまな特質ーたとえば低賃金に支えられた生産構造の前近代性ーもかかる国際市場条件に深く規定されて形成されたと考えられるからである。

さて、かかる上海市場における日本炭の炭価を決定する要因は生産コストとともに、運送費が大きな比重を占めていた。「本邦当地間ノ運賃大ニ騰貴ヲ招キタルニヨリ其輸入著シク減少(49)」をみる、「本季（明治三五年第四季ー引用者註）ヲ通シ石炭運賃率ノ平均ヲ得ス、高低常ナキヲ以テ遂ニ本季輸入ヲ減殺スルニ至レリ(50)」、「昨今当港ニ

第１２表　明治３２年７〜９月
上海輸入日本炭相場（単位：上海両）

炭種		7月	8月	9月2日
筑豊炭	最上等	7.0〜7.7	6.8〜7.5	7.0
	上等	6.3〜6.7	6.2〜6.3	6.2
	中等	5.5〜6.2	4.4〜5.5	4.5
	下等	4.3〜4.7	3.6〜4.3	3.6
長崎炭	上等	6.3〜6.8	6.0〜6.4	6.0
	中等	4.2〜4.8	4.0〜4.3	4.0
	下等	3.3〜3.9	3.0〜3.4	3.0

出典：『通商彙纂』第１４６号　２５ページより作成。
1）筑豊炭　最上等炭とは田川四尺、豊国、松ケ浦
上等炭とは大ノ浦、峯地、金谷、金田
赤池、藤棚、御徳
中等炭とは大辻、大ノ浦、大隈、小浦
下等炭とは福好、新延、頓野の各炭
2）長崎炭　上等炭とは福好、市村、柚木原、焼木、
蜂巣
中等炭とは北方、志久、山ノ田
下等炭とは福井、江口、世知原、長者の
各炭
3）１トン当り相場である。

第１３表　上海〜門司・長崎間石炭運賃
（単位：ドル）

	門司〜上海	長崎〜上海
明治30年4月	2.20	2.40
5	2.00	1.75
7	1.30	1.25
31. 4	2.00	2.00
32. 5 下旬	2.30	
6 上旬	2.09	
下旬	2.00	
7 上旬	1.60	
末	2.00	
33. 4	2.00	
11	2.30〜40	
36. 2	1.35	
3	1.60	
8. 22	1.00	1.00
9. 3	1.20	1.20
9. 17	1.00	1.20
10.	0.90	1.00

出典：『通商彙纂』各号より作成。
1）石炭１トン当り運賃である。

於ケル本邦炭ノ商況ヲ看ルニ、過般来引続キ下落ノ位置ニアル為換相場ノ影響ト石炭運賃ノ低落トニヨリ其輸入高俄然増大ノ勢ヲ示ス(51)」と報告されているように、為換相場の変動とともに運送費は上海市場への日本炭の輸入高を左右する重要な要因であった。第13表はこの時期の上海〜門司・長崎間の石炭一トン当りの船舶運賃を示したものであるが、一見して明らかな如くきわめて変動が激しい。その変動要因についてみておくと、明治三〇年四月には一トン当り二ドル二〇セントに高騰しているがこれは毎年四、五月の交りに起る現象で、天津、牛荘、ウラジオ等の航路が開き、在荷の輸出が頻繁となるため船舶が集中したことと、前年来の運賃の暴落によって外国運送船が他に航路を求めたために船舶の欠乏をもたらしたことの二つの理由によっていた。(52)また、三六年二月には一ドル三五セントに下落したが、これは一、二月の北清地方が結氷するため航路が閉鎖され、その結果として船舶が上海に集中したために起ったものであった。(53)

以上のように船舶運賃の変動は上海港への船舶の集散に起因するものであり、それは北清地方の結氷による自然的条件や、帝国主義諸列強間の軍事的・政治的要因に規定されたものであった。そして、このような運賃の変動は直ちに上海市場への輸入炭高に影響することになったのである。

5. 石炭売込先

つぎに上海輸入炭の用途・需用口についてみておこう。明治三二年五月二四日付の上海総領事館報告は日本炭の上海市場での需用状況についてつぎのようにのべている。(54)

本邦石炭ノ需用口　従来当港ニ於ケル本邦炭ノ需用口ハ紡績、製糸、綿繰、織布、製油、造船、製紙、燐寸、電燈、瓦斯、兵器製造、米利堅粉、羽毛、飲料水、麦酒、化学用酸、製氷、其他紡績糸等各種機械製造場ヨリ鉄道、汽船、小蒸気船等ニ至ル迄一々枚挙スヘカラス

右ノ外、酒、醤油製造用、湯屋又ハ自家用炭トシテ消費セラルヽモノ亦多量ニシテ、当港輸入本邦炭中蘇州、杭州ヘ輸送セラルヽモノ少額ヲ除キテハ悉ク此地ニ需用セラルヽモノナリ

すなわち、上海市場における日本炭の売込み先は㈠鉄道、汽船、小蒸気船の燃料用炭、㈡紡績、製糸、造船、兵器製造等の各種工場用炭、㈢酒、醤油製造、湯屋、暖房用等の地売り・雑用炭　の三種に分けることができる。そして、「当港ニ於ケル本邦炭ハ沿岸航路、小蒸気船、各種工場就中、紡績、製糸両場ニ消費セラルヽモノ大部分ヲ占メ」ており、その一カ月消費の割合は工場用炭一万トン、船舶焚料炭二万余トン、雑用炭一万トンであった。これに対し、英国炭の用途は軍艦用及び、欧州航路のような遠洋航路用汽船の焚料炭が中心であった。それは良質で、「効力多キ」ために高価ではあるが経済性に富み、「軍艦其他欧州航路ノ如キ長航路」にとって有利であったのである。(55)また、開平炭は海軍・汽船・鉄道用・招商局の燃料用炭として、また、家庭用としても使用されていた。(56)

明治三四年二月一五日附の上海総領事館の報告が指摘するように、(57)上海市場における需用口の最も大きかったのは船舶焚料炭であった。第14表は明治三六年の調査による上海主要汽船会社の一カ年消費高を示したものであるが、日本炭が圧倒的な比重を占めている。このように上海市場における消費高の最大なものは船舶焚料炭であったが工場用炭としての用途も次第に増大しており、中国における資本主義の発展と密着した石炭輸入高の推移に注目しておく必要がある。この点についてはすでに明治三二年二月九日付の上海総領事館報告がつぎのように指摘している。(58)

第１４表　上海主要汽船会社一カ年石炭消費高（単位：1万トン）

会社名		消費高	備考
ヂャーデン マヂソン エンド コムパニー		4.0	日本炭
バッター フキールド エンド スワイヤー		6.0	〃
招商局		5.0	〃
同		1.0	開平炭
ジョージ マクベイン（麦辺）		0.6	日本炭
グリーブス エンド コムパニー（華昌）		1.2	〃
大阪商船会社		2.4	〃
ハムバーグ アメリカン ライン		2.4	〃
メルチャース エンド コムパニー（美最時）		1.2	〃
ピーオー汽船会社		1.0	〃
曳船及ヒ小蒸気船会社		0.5	〃
大東汽船会社		0.5	〃
其ノ他ノ汽船会社		1.0	〃
軍艦		0.3	〃
同		1.0	英国炭
合計	日本炭	26.6	
	英国炭	1.0	
	開平炭	1.0	

出典：『通商彙纂』　改第５７号　４１ページによる。
1)　明治３６年の調査である。
2)　消費高はおよその算出高である。
3)　日本炭合計はあわないがそのままとした。

此等（綿糸・生糸・綿布・製紙ー引用者註）重要輸出品ハ勿論其他諸種ノ工芸品ニ於テ一般製造額ノ増殖セシハ直接石炭需要ノ増進ヲ招キ、石炭需用ノ増進ハ其輸入増加ト価格騰貴トヲ来セシ所似ナリトス、而シテ此原因タルヤ今後月ヲ改メ年移ルニ従ヒ、益々其度ヲ増進センハ勿論ニシテ、遂ニハ生糸マレ、綿糸マレ、羽毛、皮革、燐寸、製紙等諸種ノ製造ニ巨額ノ石炭ヲ需要スルニ至ルハ疑ヲ容レザル所ナリ

また、日露戦後の上海市場における需用口については明治四一年九月の物産の石炭協議会における上海支店のつぎのような報告から知ることができる。(59)

（前略）需要先ニ就テ大体申上ゲマスルト、商船焚料ニ参拾九万噸海軍用炭弐拾万噸、小蒸気ニ四万噸、鉄道、電車参万五千噸、造船及外国人ノ鉄工所ニ五万噸、紡績及棉繰場拾五万噸、瓦斯参万噸、電燈壱万五千噸、絹糸工場ガ四万噸、油屋其他諸工業合セテ参万噸、支那人ノ地売及ビ家ニ使フ石炭、蘇州及杭州ヘ運搬サレルモノ合計拾七万参千噸デアリマス（後略）

日露戦後の上海石炭市場の需用構造は基本的に変化しておらず、その量的拡大が進行していることが右の報告からもあきらかである。

6.　石炭取扱商について

第15表は明治三五年現在の上海市場における石炭取扱業者の有力なものであるが、このほか「信用薄キ小資本ノ店舗、又ハ一時的供給者」は数多くあり、(60)投機的な商人資本も多かった。そのため石炭商間の競争も激しく、しばしば相場の値崩れをひき起した。この場合、競争は日本石炭商間のそれと日本石炭商と外商・清商間のそれがあった。明治三六年三月二七日付上海総領事報告はこのような石炭商の動向をつぎのようにのべている。(61)

当地ニ於ケル本邦炭商ト称スルモノハ其一、二有力者ヲ除クノ外何レモ営業ノ根底微弱ニシテ、勿論自己ノ独力ニヨリ事業ヲ経営スルノ資力及信用アルモノニアラス、多クハ本邦炭主ニ頼リ幾何カノ口銭ヲ得ルノ約束ヲ以テ、之ヲ当地ニ輸入販売スル所謂仲継業ノ類ナレハ、一朝石炭運賃ノ低落ヲ告クルアラン乎、機以テ乗スヘシトナシ濫リニ多額ノ輸入ヲ企ツルヲ以テ、其間不幸ニシテ商況ノ頓挫ヲ来スアラン乎、忽チニシテ当地在荷ノ山ヲ成スニ至ルコト従来其例ニ乏シカラス、昨今当地貯炭高ノ過多ナルハ畢竟此一例ニナラサルヘキヲ信ス

第15表　上海における石炭商

	名称
本邦商	三井物産会社 三菱合資会社 三谷口加藤商会 順泰洋行 寒田商会
外商・清商	責任記昌 德昌 湧記 大東号 隆垣 義弁 正昇 同成 康 茂

出典：『通商彙纂』改第57号41ページより作成。

1）明治35年現在の有力石炭商である。

その結果、これらの投機的な商人資本は「当地ノ情況ニ通セズ、為メニ清商ノ奸計ニ陥リ、損失ヲ来」し、「本邦炭ヲシテ不味ニ陥シ」め、「外国炭ハ飛鳥ノ勢ヲ以テ売行キツヽアルニ、本邦炭ノ沈静ニ傾」くといった問題をひき起していたのである。(62) 一方、有力石炭商間における競争も激しく、とくに日露戦後はその競争は一層の激しさを加えることになる。つぎに掲げるのは明治三九年四月の物産の石炭協議会における上海支店の報告であるが、その実態をよく示している。(63)

上海ニ於ケル競争者ハ内地ト同様、三菱、「ホツキンス」、泰茂洋行、「モラーブラザー」、永宝洋行ノ如キモノニテ、其中、効敵ト見ルヘキハ三菱ナリ、三菱ニテハ既ニ支店ヲ開キシカ、之ヲ開クニ付テハ大ニ活動セントスルノ計画ナルヘシ、而シテ是迄ノ大口ノ約定ハPO会社、大阪商船、支那人ノ汽船会社用焚料ニテ約十万噸アルヘシ、其ニハ別ニ定リタル得意先モナク、従ッテ大高ノ売込ハアラサルヘキモ、併シ我社ノ商売ニ対シテハ妨害タルハ言フ迄モナシ

（後略）

こうして、日露戦争前後には三菱のほか古河、大倉、高田等が上海に支店を設置し、石炭取扱業への進出に積極的な姿勢を示しはじめた。(64) 古河、大倉、高田等が上海に進出するようになったのは日露戦後の「御用商売」の減少によって生じた余力を海外市場に向けようとしたためであるが、このような有力資本の上海市場への進出は物産や三菱との競争をさらに激化させるものであった。そしてかかる競争に打勝つため石炭商は石炭産業への進出を積極化していく。物産と石炭産業との関係はその一つの典型を示すものといってよいであろう。

以上、当該時期の上海市場における石炭取扱業者の動向を明らかにしてきたのであるが、重要なことは三井、三菱資本などの大資本によるかかる上海石炭市場への進出が両者の競合・矛盾をはらみつつも、日本帝国主義の尖兵としての役割をその本質において担っていたということなのである。

註

(1) 外務省通商局『清国事情』第一輯　五三三頁。

(2) 根岸佶編『清国商業綜覧』第二巻　七八頁。
なお、同書は上海、香港がかかる外国貿易の中心となった理由として、㈠上海、香港ノ形勢雄偉ナルコト、㈡商業機関ノ完備セルコト、㈢外人上海、香港以外ニテ貿易スルノ不利ナルコト　の三点をあげている（七九～八四頁）。

(3) 『通商彙纂』第一七二号　五三頁。

(4) 根岸編『清国商業綜覧』第二巻　三一二頁。

(5) 吉田虎雄『支那貿易事情』一七九～八〇頁。

(6) 根岸編『清国商業綜覧』第二巻　二八四～五頁。

(7) 『通商彙纂』第二五六号　二一頁。

(8) 『通商彙纂』第一二五号　一～三頁。

(9) 『通商彙纂』第一二五号　六～九頁。

(10) ここで、かかる上海輸入炭の動向を規定する最大の要因であった中国をめぐる帝国主義諸列強の動向について若干補足しておこう。

帝国主義列強が中国の領土分轄を推し進める直接的契機は一八九四～五年の日清戦争における清国の敗北であった。ロシアは一八九六年の露清密約（李・ロバノフ密約、カシニー密約）で東清鉄道敷設権を獲得、九八年着工した。さらに同年、旅順・大連の二五年間租借に成功、「年来熱望シテ止マザリシ大平洋ノ不凍港」を得、ハルピン・旅順間の鉄道敷設権も獲得したのである。ドイツは九八年、山東省曹州府鉅野において宣教師殺害事件が起ると膠州湾を占領し、九九年間の租借に成功して青島市を建設した。一方、イギリスは九八年に九龍全域の九九年間租借権を得るとともに、威海衛の二五年間租借権を獲得したのである。また、フランスはこれらの列強の動きに対応して、広州湾地域における士官殺害事件を契機に九八年には同地域を占領し、翌九九年には広州湾の九九年間租借に成功したのである。これに対し、日本は日清戦争で台湾を領有するとともに、九八年にはその対岸たる清国福建省の不割譲宣言を清国に出させることに成功したのである。また、これらの諸国に遅れたアメリカは一九〇〇年三月には門戸開放宣言を発表して、清国の帝国主義的分割の機会均等を主張した。このように清国の帝国主義的領土分轄を推し進めた諸列強はその占領地にまず、貯炭場の建設をすすめたのである（以上の諸点については、東亜同文会『支那経済全書』第七輯　六二三～三〇頁をも参照せよ）。

(11) 以下については三井物産合名会社『明治三一年事業報告』　物産六一四ノ三　六～七頁を参照。

(12) 明治四三年書かれた根岸佶「支那工業ノ前途」（其四完了）はこのような上海、漢口への新設諸工場の集中の理由として、㈠交通便利のこと、㈡周囲に広大な生産消費地を擁していること、㈢各種の機関の具備していること、㈣労働者を得やすいこと　㈤生命財産の保護が充分であること、の五点をあげている（『東亜同文会支那調査報告書』　第一巻第三号　八～九頁）。

ここで、当該時期の中国紡績業の発展についてみれば、その経営は英・米・日・独の外国資本、清国民族資本、外・清合弁資本の三形態があり、就中、近代的工場設備を備えた外国資本が支配的であったが、かかる列強資本の中国紡績業への進出の直接的契機は明治二八年の下関条約、二九年の日清通商航海条約締結による清国内における工場設立の許可と、工場経営上の優位の承認にあった。ちなみに、三井資本に関していえば明治二九年には上海に紡績工場設置を企て（結果的には中止され、鐘紡兵庫工場となる）、三五年一二月には上海興紗廠を買収、さらに三九年四月に上海大純廠を買収、三泰紗廠と改め、四一年にはこの両者を合併して上海紡績株式会社を設立したのである（以上については厳中平著・依田嘉家訳『中国近代産業発達史』　第五章　とくに一七七～二一一頁を参照せよ）。また、清国紡績業の発展についての別の資料は「因ニ清国製綿糸ノ産額ハ其確数ヲ知リ難シト雖モ、上海ヨリ各地ニ販出セシ数量ヲ検スルニ一九〇七年ニハ僅ニ一八万七千担ニ過キサリシカ、一九〇八年ニハ三七万八千担ニ上リ、本年（一九〇九年―引用者註）ハ已ニ四二万五千〇五五担ニ達セリ、之ニ依リテ見レハ清国ニ於ケル綿糸紡績業カ逐年発展シ来レルヲ知ルニ足ルヘシ、随テ亦綿布ノ製織モ漸次進歩シ来レルヲ見ル」（農商務省商務局『一九〇九年ニ於ケル支那貿易ノ概況』　二〇頁）とのべ、日露戦後における斯業の発展が顕著であったことを示している。

(13) 『通商彙纂』　第一三七号　三八頁。

なお、『通商彙纂』　第一四六号　二五頁　をも参照。

(14) 以上については、『通商彙纂』　第一三七号　三七～八頁　参照。

(15) このほかその規定要因としてたとえば、明治三六年三月の上海総領事館報告が「昨今当地ニ於ケル本邦炭ノ商況ヲ記サンニ本年（三六年―引用者註）一月以降今日ニ至迄兎角商談捗々シカラス、捌口不良ニシテ引続キ不味ノ状況ヲ持続セリ、是当地ニ於テ近時雨天連続セルヲ以テ清商ノ多クハ在庫品ノ引取ヲ為サス（石炭ハ雨天ト雖トモ水引ヲナササルニヨリ）、又、晩近長江及附近需要地ノ河口減水ノ為メ支那船ノ下航シ来ルモノ極メテ減少シ、石炭運漕船ニ不足ヲ感シタルヲ以テ是等ノ原因ハ倍々炭況ヲ銷沈セシムルニ至レリ」と

のべているような市況不振があった（『通商彙纂』　改第四号　六～七頁）。

(16)『東亜同文会支那調査報告書』　第一巻第一号　二六頁。

(17)以上については『通商彙纂』　第一三七号　三六頁参照。

(18)『通商彙纂』　第一二五号　一頁。

(19)『通商彙纂』　第九九号　二二頁。

(20)『通商彙纂』　第二三七号　二頁。

(21)『通商彙纂』　改第四号　八頁。

(22)三井物産会社『石炭諮問会議々事録』（明治三〇年）物産一九九　八頁。

(23)『通商彙纂』　改第四号　八頁

(24)たとえば、明治四一年八月の物産支店長諮問会議において、中丸一平門司支店長は「濠州炭、印度炭ハ非常ニ安値ヲ出シ場合ニ依リテハ香港迄モ侵入シ来ルコトナキヤ、現ニ新嘉坡ハ三池炭ノ大得意ナルガ、此地ニ於テモ一、二ノ者連合シテ、今少シ三池炭ノ価ヲ引下ケ貰ハサレハ之ヲ使用スルコト能ハス、濠州炭ハ非常ニ安値ヲ出シ来ルヲ以テ自然之ニ傾クニ至ルヘキヲ以テ、是非値引ヲ為スヘシト交渉ヲ受ケタルコトモ聞キタリ、兎ニ角濠州炭、印度炭ハ明年ノ約定ニ於テハ非常ニ跋扈スルコトナキヤ」とのべている（三井物産会社『支店長諮問会議事録』＜明治四一年＞－以下『諮問会議事録』と略称する－　一四一頁）。濠州炭が印度炭とともに新嘉坡市場で三池炭の競争炭となっていることを示すとともに、上海市場への濠州炭進出の規制要因が運賃に規定された高炭価にあったことを示している（この点については明治四一年の広東省一帯の石炭市況についての報告でも「濠州炭ハ距離遠隔ニシテ運賃其他ノ関係上価格高クシテ到底覇ヲ市場ニ称スル事難ク」＜『東亜同文会支那調査報告書』　第一巻第一号　二六頁＞とのべられていることからも明らかである）。

(25)明治三五年一〇月の上海総領事館報告はこの点についてつぎのように報告している（『通商彙纂』　第二三七号　二頁）。

清国炭ハ市況頗ル平穏無事ニシテ毫モ変化ナシ、本炭中開平炭ハ稍ヤ勢力ヲ有スルモ当地ニ於ケル重モナル需用者ハ招商局ニシテ、一ケ年ノ需用高約一万噸ヲ消費シ、他ハ鉄道機関車用、又ハ家事用ナルモ其ノ額甚タ少額ナレハ、随テ市況ノ変化稀ナリト云フ、元来本炭ハ其ノ品質本邦炭ニ匹敵スルヲ以テ間々之レヲ用ヰントスルモノナキニアラスト雖トモ、其ノ価格本邦炭ノ廉ニ及ハサルモノアリ、若シ之レニ及フモノヲ取ラン乎、其品質頗ル本邦炭ニ下ルモノアリ、比較上本邦炭ノ廉良ナルニ若サルモノアルヲ以テ未タ其ノ需用ヲ盛ナラシムルニ至ラス、依然一ケ年二、三万噸ノ輸入ヲ見ルニ過キス、今本年初季以来九月末日ニ至ル開平炭ノ輸入高ハ約二万二千余噸ニシテ其ノ額極メテ微々タルモノトス

東亜同文会『支那経済全書』　第七輯　八〇二～三頁。

(26)なお、当該時期の清国石炭産業の状況については、『通商彙纂』　第一二七号　一九～二二頁、根岸佶編『清国商業綜覧』　第五巻　六三二～七六〇頁、及び、『通商彙纂』　第一二七号　一九～二二頁を参照。

(27)『通商彙纂』　第八〇号　九頁。

(28)『通商彙纂』　第七〇号　二二頁。

(29)『通商彙纂』　第一二七号　二三頁。

(30)『石炭諮問会々議録』（明治三四年）　物産二〇一　九頁。

(31)『支店長諮問会議々事録』（明治四〇年）　物産一九七ノ六　二二五頁。

(32)『支店長諮問会議々事録』（明治三八年）　物産一九七ノ四　三三～四頁。

(33)『石炭協議会議事録』（明治三九年）　物産二〇三　一八一頁。

(34)『支店長諮問会議々事録』（明治四一年）　物産一九七ノ七　一六七頁。

(35)『石炭協議会議事録』（明治三九年）　物産二〇三　一八一頁。

(36)『石炭協議会議事録』（明治四一年）　物産二〇五　一二七頁。

(37)東亜同文会『支那調査報告』　第一巻第三号　七二～三頁。

なお、開平炭礦の推移については久保山雄三『支那石炭事情』二四二～三頁をも参照。

(38)『明治工業史』鉱業編　七八〇～八九頁。

(39)『南満州鉄道株式会社三十年略史』　四五二頁。

(40)以上については『石炭協議会議事録』（明治三九年）物産二〇三　一七五～六頁　を参照。

(41)『支店長諮問会議事録』（明治四〇年）　物産一九七ノ六　二一六～七頁。

(42)『支店長諮問会議事録』（明治四一年）　物産一九七ノ七　一六八頁。

(43)なお、このような困難を打開するために、物産は満鉄との間に委託販売契約を結び、その結果、「我社ハ一手販売ノ特権ナキモ、実際ニ於テハ殆ト我社ノ手ヲ経ツヽアレハ、今ノ間ニ益々其根底ヲ固クセント」（『石炭諮問会議事録』〈明治四一年〉　物産一九七ノ七　一六四頁）するに至った。物産は石炭販売業の拡大にともなう撫順炭との矛盾を委託販売契約を結ぶことによって、すなわち、競争炭そのものを自己の取扱炭として解消しようとした。ここにも当該時期の物産の世界市場における流通独占への指向をみることができる。

(44)『石炭協議会議事録』（明治三八年）　物産二〇二　八九～九〇頁。

(45)『支店長会議々録』（大正二年）　物産一九八ノ二　九三頁。

(46)たとえば、『通商彙纂』　第一二五号　四～五頁　を参照。

(47)『通商彙纂』　第二三七号　一～二頁。

(48)『通商彙纂』　第一七一号　二四頁。

(49)『通商彙纂』　第二三七号　一頁。

(50)『通商彙纂』　改第一六号　六頁。

(51)『通商彙纂』　改第三五号　一頁。

(52)『通商彙纂』　第七〇号　二二頁。

(53)『通商彙纂』　改第四号　七頁。

(54)『通商彙纂』　第一三七号　三五頁。

(55)以上については『通商彙纂』　第一三七号　三六頁　を参照。

(56)『通商彙纂』　改第五七号　四〇～一頁。

(57)この報告は「当地冬期ニ於テ石炭ノ消費額ハ一ケ月三、四万噸ナリトス、而シテ其半額ハ当地汽船会社ニテ使用シ、其残半ハ諸工場及「ストーヴ」等ノ燃料トナル割合ナリ」とのべている（『通商彙纂』　第一八八号　三頁）。

(58)『通商彙纂』　第一二五号　七頁。

(59)『石炭協議会議事録』（明治四一年）　物産二〇五　一二六～七頁。

(60)『通商彙纂』　改第五七号　四一頁。

(61)『通商彙纂』　改第四号　七頁。

(62)以上については『通商彙纂』　第九九号　二二頁　を参照。

(63)『石炭協議会議事録』（明治三九年）　物産二〇三　五五頁。

(64)なお、三菱をはじめ安川、谷口、加藤、千住、宮崎等の石炭商が従来の方針を転換し、石炭業に積極的に取組むようになったのは明治三三年三月の三井の田川炭礦買収による筑豊炭への進出が直接的契機となっているという（『石炭諮問会議事録』〈明治三四年〉　物産二〇一　一〇～二頁）。

展望――まとめにかえて――

以上、明治三〇～四〇年代という国内的には資本主義確立期＝財閥資本形成期であり、世界史的には帝国主義段階への移行期に当る時期に焦点を合せつつ、上海石炭市場の展開をやや詳しくみてきた。その結果、われわれは該市場におけ日本炭の支配的地位を知ることができた。しかしながら注意されなくてはならないのはこのような圧倒的な日本炭の地位もその内実はきわめて不安定であり、激しい市場競争を

通じて展開していたことである。そして、このような石炭輸出業は財閥資本にとっては中国市場進出への橋頭堡を築く上での最も重要な手段でもあった。従って、上海石炭市場での日本炭の支配力を強めることは同時に、財閥資本の石炭産業への進出を一そう促進せしめることになった。こうした財閥資本と石炭産業の結合を国際市場での展開を通して明らかにすることが一つの課題であり、それはまた、日本石炭産業の構造的特質の解明にとっても不可欠な問題でもある。

そして、その一作業として以上みてきたような上海石炭市場における三井物産の石炭取扱業の展開を明らかにし、そのことを通じて三井財閥形成史の特質の究明をおこなうことがつぎに残された課題なのである。

（一九七七・八・三一）

執筆者紹介（掲載順）

四宮　俊之　明治大学大学院博士課程
山下　直登　東京教育大学大学院博士課程
出水　力　大阪府立和泉工業高等学校教諭
入江　寿紀　西日本鉄道本社勤務
左合藤三郎　元『労務管理年誌』編集委員
細川　章　多久市立図書館司書
安藤　保　東海大学助教授（文学部）
今野　孝　麻生セメント本社社史資料室
秀村　選三　九州大学教授（経済学部）
東定　宣昌　第一経済大学専任講師
稲富　清　安川電機製作所小倉診療所長
川内　昇　多久市助役
今津　健治　神戸大学助教授（教養部）
八田千恵子　佐賀新聞社勤務
町田　保次　熊本行政監察局勤務